

切り捨てられない歴史と心象事実 —トランプ支えるナラティブ



杉田 弘毅

共同通信社 客員論説委員・元ワシントン支局長

なぜこんな嘘が繰り返されるのか、と疑問に駆られる言説が国際社会では飛び交う。選挙や戦争など敵と味方が戦うときには、嘘とわかっていても扇動目的で使われる。インターネット、SNSが言論の主戦場となった今は、なおさら真偽は二の次とばかりに、ひどい話が流布されている。

そこではファクト・チェックも理性的な説明も効果を上げない。あるのは恐怖を植え付け、敵をおとしめるナラティブの嵐だ。それにしてもなぜか。探してみると、人々の琴線に触れる巧みな仕掛けが浮き彫りになる。

「嘘八百」「血迷っている」と切り捨てても効果はない。歴史、民族心理、そして国際政治の背景が1つ1つの話りの裏に潜むからだ。今の世界を動かすナラティブを検証してみたい。

ハイチ人はペットの猫や犬を食べる？

何ともひどい話だ。2024年大統領選を揺さぶったナラティブ「ハイチ人移民は猫や犬を盗んで食べている」である。オハイオ州中部の小都市スプリングフィールドはハイチ人移民の流入で混乱しており、地元住民が飼っていたペットが空腹の移民によってとうとう食べられだしたとの話だ。

もともと上品さや少数民族への敬意などお構いなしの共和党大統領候補ドナルド・トランプが9月10日のテレビ討論で取り上げて物議をかもした。聞いたとたんに恐怖を覚え、事実を調べることなく冷静な判断を鈍らせ、移民反対派の琴線に触れた。

スプリングフィールド市は人口6万人だが2018年からハイチ人が移住し始め今ではその数は1万2000人、実に人口の20%に膨れ上がった。30万人以上が死亡したハイチ大地震（2010年）や長引く内戦の被害者救済のために米政府が発給した暫定保護資格を得て米国に移った「合法移民」である。

なぜ彼らがスプリングフィールドを新たな居処として選んだかといえば、製造業が衰退したラストベルト

の一隅にあり、貧困率は全米の2倍、そのため物価が安いからだ。

この話は9月に入って右派サイトで「隣人の娘の友達の話によると」といった、いかにもはっきりしない情報として流れていた。トランプ発言を受けて市は「ハイチ移民にペットを捕食されたという報告はない」との声明を発表し、ハイチ人を雇用する工場主は「彼らは米国人がやらない低賃金労働をやってくれている。もっとハイチ人を雇いたい」とメディアインタビューにコメントした。

トランプ発言を「くだらない」とオハイオ州の共和党知事マイク・デワインは一蹴し、ハイチ人団体は「人種差別だ」とトランプを告発、移民の動物虐待犯罪率は実は米国生まれの市民より低い、との学術報告も発表された。知事のデワインは私もインタビューしたことがあるが、共和党に所属しながら穏健派であり超党派で州務をこなす人物だ。トランプとは違う良識の人である。トランプとデワインとどちらを信じるかと問われれば、間違いなくデワインが選ばれるだろう。

占領されたアメリカ

それでもトランプのハイチ人蔑視発言は止まらない。9月末のペンシルベニア州での演説ではハイチ人が移住した同州の町シャレロイをあげて「町が変わってしまった」と嘆き、トランプの副大統領候補のJD・バンズは「次はあなたの町だ」と恐怖を煽った。

トランプ政権での高官ポストが約束されている実業家のイーロン・マスクもハイチ移民は猫を捕食している、とのメッセージを拡散し、熱烈なトランプ派の下院議員クレイ・ヒギンズは「ハイチ人はペットを食べるギャング。早く本国へ帰れ」と酷い。

驚くことに討論会での発言以降もトランプの支持率は下がらなかった。メディアがフェイク情報、人種差別と騒いだにも関わらず、トランプは打撃を受けなかった。

ハイチ人移民ほどではないが、トランプはベネズエ

ラ人移民のことも「ギャング、犯罪人」と呼び大統領に当選したら強制送還すると宣言し、ベネズエラ人移民の定住先となったコロラド州オーロラ市を「ベネズエラ人ギャングに乗っ取られてしまった」と嘆いた。これもオーロラ市当局は即座に否定している。

外国からの移民によって「アメリカは占領されその血が汚された」はトランプの十八番の演説テーマであり、大統領選の投票日である11月5日はトランプが当選することで移民の強制送還が始まり、ようやく「アメリカが解放される日だ」と述べて聴衆を喜ばせている。第一期政権の就任式の演説「アメリカの虐殺」も占領され虐殺されるアメリカ人の運命を警告する内容だった。

こうしたトランプ演説を受けて右派サイトでは犯罪など移民問題のニュースがますます盛んだ。

嘘八百でも構わない

この執拗さは何なのか。メディアや民主党は「嘘とわかっていても少しでも票になれば、発信を続けるのだから嘆かわしい」と切り捨てる。陰謀論者のでっち上げだと否定する。だが、このナラティブは虚偽であっても人々の潜在意識や恐れにつけこむ効果をもつ。そして「いかにもありそうだ」と誤解させる要素も含む。そこを把握しないと、アメリカの実相は見えてこない。

トランプの狙いは票だ。移民が米経済にプラスの効果をもたらしているのは事実だが、一方で不安も植え付けている。1200万人を越す不法移民が犯罪集団をつくり、暴力犯罪や麻薬のまん延の元凶だとの話は主流派の地位を徐々に脅かされている白人には受け入れられやすい。

9月に発表された世論調査では、共和党支持者の間では移民が暴力犯罪の増加をもたらしたとの回答は81%で、全体でも51%がそう答えた。共和党支持者は71%が移民のために米国人の職が奪われている、とも述べている。アメリカ人の日常の不満や怒りの矛先は移民に向けられている。

トランプは2016年の選挙で移民は婦女暴行者だと言い、メキシコ国境につくる「壁」を建設するとの公約を掲げて当選した。この成功体験は大きい。しかも対抗馬の民主党候補カマラ・ハリスは移民政策では強い規制を打ち出せずに、支持率で10ポイント以上トランプに負けている。「移民に寛容なハリス」「不法移民を強制送還するタフなトランプ」を強調すれば、票は取れる。

特にハイチはフランス植民地だったことから英語も

スペイン語も話さず、コミュニケーションが難しい。職場や学校、医療機関などでの通訳費がかさみ、税金の浪費と批判される。

間が悪いことに、今年8月にはスプリングフィールドでハイチ人が運転する車がスクールバスと衝突しバスに乗っていた11歳の白人男児が死亡する悲劇があった。これを機に地元のジャーナリストがハイチ人移民問題を考えるグループを組織し「地元住民を守るため」と運動を始めてトランプ派に接近した。

火に油を注ぐように、これも8月にオハイオ州の別の町で黒人女性が猫の虐待・捕食で訴追される事件が起きた。この女性はハイチ人移民ではないが、猫犬捕食が起きていないとは言えないといった言説を補強してしまっている。

副大統領候補のバンスは真実と証明されていないハイチ移民の話なぜ持ち出しているのかについて聞かれると、「誤情報かもしれない。だがメディアがもっと移民問題に注意を向けるよう話をつくった」と開き直っている。移民の大量流入を嫌う米国民は多いから、仕掛けた虚偽ナラティブは成功したという胸算用だろう。

選挙戦略の道具として、これだけ見下され虐げられているハイチ人移民は本当に気の毒としか言いようがない。

移民はノルウェーから

日本で理解が難しいのが、ハイチという国がトランプにどう見られているか、という点だ。有名なのは、トランプが大統領時代の2018年1月にハイチをshitholeと表現したことだ。日本メディアは「野外便所」「くそだめ」と訳した。トランプはこれを移民政策の議論の中で述べたのだが、同時にハイチやアフリカでなく「ノルウェーのような国からの移民を増やす」よう求めた。彼の差別的な人種観がよくわかる。

トランプだけではない。米国は常にハイチを見下してきた。1915年に当時フランスやドイツとの関係が強かったハイチに「秩序と経済の安定のため」と称して侵攻し19年間支配したが、人種差別政策で1万5000人のハイチ人の死者を出しながら統治は失敗に終わった。第2次大戦後は長く米国の傀儡政権が続いたが、内戦に打つ手がなく、大統領の亡命や暗殺などが続き「ハイチ人は自ら統治ができない」というイメージが植え付けられた。

先述したようにイーロン・マスクは、トランプのテレビ討論発言を受けてそれを補強するメッセージを拡散したが、トランプ発言の半年前の今年3月にはハイチで

内戦の混乱が限界に達し、武装組織が人肉を食べているとのまったく証明されていない情報を拡散している。

右派のコメンテーターの中には「こうした人肉食のハイチ人が米国に大挙して入国している」と驚くべき虚偽発言をする者もいる。米政府や現地で活動する国際援助機関はそんな事実は確認されていないと否定しているが、正しい情報はなぜかスルーされてしまう。

ハイチは輝かしい歴史をもつ国だ。1804年にフランスから黒人奴隷が独立を果たした世界初の黒人共和国なのだ。だがこの頃米国は奴隷制の国だったから、黒人奴隷の解放・独立国の誕生は悪夢でもあった。このため、ハイチの独立当初から同国の黒人独立派を「殺人鬼」と扱ってきたと歴史家は指摘している。

80年代からの先入観

シニア世代の米国人にとってハイチで連想するのは、エイズウイルスである。1980年代にエイズは米国で急速に感染が広がったが、当時米国で感染源と名指しされたのが、アフリカとハイチだ。なかでも米国と近いハイチへの目は厳しかった。レーガン政権はエイズを4H病と表現した。4つのHはホモセクシュアル、ヘロイン常用者などとともにハイチのHである。

当時内戦を逃れてハイチから米国に渡る不法移民が急増しフロリダ州などに一時収監センターができて大きなニュースとなっていた。アフリカ系の罹患率が高いという事実もあり、ハイチ人移民はエイズ感染者という、科学的に証明されていない認識が米国民に広がった。

トランプは2017年6月に移民政策に関するホワイトハウスの会議で「ハイチ移民は皆エイズウイルスに感染している」と語り、出席者を啞然とさせたという。日本との貿易に今でも強い不満を口走るなどトランプの世界観は1980年代のまま、とよく嘆かれるが、まさに80年代ハイチはエイズと結びつけられており、その歪んだ先入観が今もトランプにはあるようだ。

ハリスの父親はハイチの隣国であるジャマイカの出身だ。ハリスを移民の子孫として扱うことで、アメリカにとって危険な人物というイメージを醸し出す狙いもあるのかもしれない。

トランプは、元大統領のバラク・オバマが実はハワイではなくアフリカ生まれであり、憲法上大統領になる資格はないとの虚偽をかつて繰り返した。移民を嫌う白人ナショナリズムは、トランプの一貫したテーマであり、それに賛同する膨大な数の米国人がいるのをトランプはよく知っている。

エモクラシーの時代

2017年1月のトランプの大統領就任式は、集まった人数を150万人とするトランプと半分以下の人数を報じたメディアが対立した。「空撮写真を基にした客観的事実」と伝えたメディアに対して、ケリアン・コンウエー大統領顧問は「オルタナティブ・ファクト（もう1つの事実）がある」と主張して驚かせた。ファクトは1つのはずだが、もう一つのファクトとは何だ、と問い詰められて、コンウエーは心象事実といった謎めいた説明をした。ジョージ・オーウェルの有名な小説『1984』が描く事実を命令に従って書き替える『真実省』をほうふつさせるエピソードだ。

トランプが1987年に出版した自伝『The Art of the Deal』の中でトランプの性格を物語る興味深い記述がある。それはビジネスの成功の秘訣は「はったりで人々の夢をかきたてる」ことだと述べているのだ。人々は自らは小さい存在であると知っているからこそ、「大きなものやものすごいこと」を喜んで受け入れるのであって、「罪のない誇張は宣伝に役立つ」との趣旨を述べている。

実際彼の不動産ビジネスは「世界一高いビル」などと虚偽がないまぜとなったオルタナティブ・ファクトで成り立った。司会役として成功したテレビのリアリティショーもそうだ。

よい夢も悪夢も、そして恐怖も駆り立ててビジネスだけでなく票も動かす、そして大統領に返り咲くという最終目的のためには、ハイチ人移民の行状をファクトでなく、心象を頼りに伝えることに罪悪感を抱かない。ハイチ人移民について語るときには、必ずハリスが副大統領として「犯罪人移民を第3世界から輸入して国内に定住させ、善良な米国人を犠牲にしている」とものすごい論法で不安と怒りを煽っているのだ。

人間心理の不安、怒り、琴線に虚偽で働きかけるもう1つの事実。そんなナラティブは米国だけでなく世界の政治を動かしている。政治が民主主義（デモクラシー）でなく感情（エモーション）で動かされていることを表現するエモクラシーという言葉が、欧米の政治学者の間で聞かれだした。感情で票を操るのはまさにトランプの得意技である。

だが、事実やデータ、科学に基づかないエモクラシーでは、戦争も経済格差も、気候変動もデジタル技術の専横も、本質的な解決策は何1つ見つからないことを肝に銘じるべきであろう。

（2024年11月4日記）

